

碧雲暗雲

悲痛の感激、悲痛の快感

◇ 僕は、泉鏡花の初期の小説が大好きだ。田岡嶺雲の銀漢の如き熱筆が好きだ。アルチバセエイフの深刻味が好きだ。

これ等は皆な、僕の求むる「悲痛なる感激」を與へてくれる。

◇ 僕は、舊劇と講義が大好きだ。舊劇では、南北ものの陰惨悪烈な世界が好きだ。默阿彌の白浪ものも悪くはない。講義では、旗本五人男、五漢録、姐妃のお百、鬼神のお松、天保六花選などが好きだ。

これ等は皆な、僕の求むる「悲痛なる感激」を與へてくれる。

◇ 僕は、野獸的狂想と、落魄無残との泥濘たる帝都木賃宿の空氣の中に、悲痛なる感激の融合を覚える。その深川富川町に於ては、人夫、立ッ坊を主とする野獸的の狂想な生活の裡に。その浅草深橋に於ては、大道藝人、大道商人、吉原者、公團者を中心とする、無残なる落魄と陰惨なる痴情との裡に。

僕は又、はした博奕打と、泥濘の惡臭と、病毒癰疽の女とが渦巻く淫賣窟や、抜け蓑女郎屋の廻し部屋の中などの無道德的な悽愴な空氣にも、堪まらないほどに悲痛な、一種の執着をう感じさされる。

◇ 僕は雷鳴が好きだ。殊に、あの蒼みがかった稲妻の光りが好きだ。あの悲痛な色の閃光を浴びると、頭の中のものもやしたものがすつと抜け出してふ様に感じる。

◇ 僕は俳句が好きだ。僕はその寂寞、枯淡、飄逸、靜觀、透徹の短句の中に、人間の有つ不思議な色合の悲痛味を感得する。僕は芭蕉の句が好きだ。が、

やがて死ぬけしきは見えぬ松の蟬

もの言へば口びる寒し秋の風

道端の木槿は馬に喰はれけり

などといふ、謂ゆる人口に膾炙する句ほど嫌やなものはない。例の有名な

古池や蛙とび込む水の音

といふ句なんかも、いやに悟り顔なのが氣に喰はない。

うき我を淋しがらせよ閑古鳥
旅に病んで夢は枯野をかけめぐる

といふ境地の句の方が、僕はすつと好きだ。これらの句には、芭蕉の悲痛味がまぎ／＼と流れ出てゐる。

僕は芭蕉よりは一茶が好きだ。一茶には俳人臭い氣取りが少ない。かれの句は、その笑ひも、悲嘆も、憎しみも、皆な眞情のままに吐露されてゐる。

ぼく／＼と霞むで来るはどなたかな

よい日柄蚤が躍るぞはねるぞよ

こほろぎのころ／＼一人笑ひかな

一茶が笑へば、こほろぎも笑ふ――。

煤掃の世話のなき身を涙かな
木つつきの死ねとて叩く柱かな

こんなに彼は、老ひと貧と愚との自分を悲涙にむせび返つてゐる。更にまた故郷の人の無情を恨み憎んで、

心に思ふことを

古里は蠅まで人を刺しにけり
こころから信濃の雪に降られけり

と句に吐いてゐる。また人間の醜さを、

甘からばさぞ人の露おらが露

とも嘲つてゐる。

◇ 僕はこれ等の句を通して、――「悲嘆」「憎しみ」を現はした句は素より、その「笑ひの句」をも通じて、その中に流るる「一茶」といふ人間の悲痛味を如實に感得する。それがひし／＼と心に迫つて来るのを覚える。

◇ 僕がまだ、四つか五つか位の時だつた。秋、大雨が降り續いて、明石城内の奥の池が潰壊し、明石川の堤が破れて、城近くの大明石村にあつた僕達ちの貧居は、忽ち洪水に襲はれた。水は餘りに急だつたので、やつと疊を上げるのが間に合つたくらいだつた。が、洪水はぐんぐんと床の上へ浸して來た。床の上に床机や炭箱を臺に置いて疊を積み上げ、僕はその上へ坐らされてゐた。が、家主の宿屋から人が迎えに來てくれて、僕等は、やつとの事でその二階に體を運んだ。

洪水は明る日の午後になつてからさつと引いてしまつた。そして、夏の様にカン／＼照る太

陽が憎々し、空に輝いてゐた。家はその割に破損しなかつた。裏の土塀が倒れたのと、壁のあちこちに穴が明いたくらいのもので、炭箱も、米箱も、臺所道具も、大半何處かへ流れてしまつてゐた。佛壇が便所の傍にひっくり返つてゐた。臺と布團がぐしやぐしになつて庭と床に散らかつてゐた。

それから四五日経つた、秋晴の日のことである。僕の家は洪水以後臺がなくなつてしまつて、床の上へ蓆が敷いてあつた。僕はそれが悲しくてしかたがなかつたので、毎日のやうにだだけては両親を困らせてゐた。その日も、まだ濡れ濡れた臺が軒先きの道路に積んであつたので、僕は外で、その臺の死骸を懐かしさうにちつと眺めてゐた。すると、羽織袴と洋服との立派な紳士が二人、何事かを話しながら驛の方からやつて來た。そして、二人の紳士は僕の居る直ぐ傍で立ち止まり、更に何事かを熱心に話した。

二人とも洋杖を持つてゐたが、何にやら笑つて話しながら、その洋杖でブスブスと柔かくなつた臺をつつ突きだした。僕は「ハッ」と思つた。そして、二人の紳士を憎々しさうにちつと見据えてゐたが、二人の紳士は、その傍で睨みつけてゐる土娃のやうな小仲のことなんか素より氣も附かなかつた。相變らず洋杖で臺へ穴を明けながら笑ひ話に耽つてゐた。僕は泣き顔をして家の中へ飛び込んで行つた。そして、臺所に居た母の袖を引つゝ掴んで、

『お母さん、いま餘所のおつさんがなす、棒でうちの臺に穴を明けよるぜ。早う行つて、怒つてやつてえな、怒つてやつてえなア——』

と訴へた。母親は、初め僕の飛び込んで來た權幕に驚いて僕の顔を眺めてゐたが、その訴ふところを聞いて笑ひ出した。

『まあ……お前え……、あんな腐つてしまつた臺は、もうどないなつたとてかまへんやないかいな。』

僕は母親の答へが更に癪に觸つた。で、恐はい顔をしてちつと母親をねめつた。すると母親は、急に氣を換えた風に、

『うん、さうか、よしや、よしや。いま此處が濟んだら外へ行つてそのおつさんを、うんと叱つてやる。待つといでや。』

と言ひながら、再び手を働かせ出した。僕はまだ一言二言母親に向つて何か言つてゐたが、何によりも外の臺のことが氣になるので、また飛出して見た。すると、洋服の方は既に四邊りに見えなかつたが、羽織袴の方が、その洋服の歸つて來るのを待つものの様に、腐れ臺の上にしやがみ込んでゐた。僕はそれを見ると堪らなくなつて、

『アア……』

と泣き叫びながらその紳士に掴みかかつて行つた。紳士は大いに驚いて、

『なんだ、なんだ、どうしたんだ！』

と言ひながら立ち上つて、突つかかつて行く僕の體をさへぎつた。泣き聲を聞きつけた母親は内から飛出して來た。そして紳士に向つて何やら詫言ひながら、急いで僕の體を引つ抱えて家へ連れて入つた。

僕は、子供の時分からこんな性向のあつた男だ。そして、僕が「悲痛なる感激」を求むるやうになつた氣持の成長は、深くこの時代の環境から芽が生えて來てゐる様に思ふ。

◇

僕は廿一歳の夏、土佐の海へ自殺に行つた事があるのだが、その時の自殺未遂の旅の漂泊に於いて「悲痛なる感激」を求める僕の氣持ちは一層の深化を遂げ、強い力が加はつて來た様に思ふ。

それは八月の中頃であつた。土佐の南端宇佐の海岸で自殺を爲損つた僕は、一旦伊那町に引返し、こんどは北に向つて山の中へ進んで行つた。何處へ行かうといふやうな目的なんかあるんぢやない。ただ滅茶々に歩いて行きたかつたのだ。腹が減つて來る——足も利かなくなつてくる——山の中の何處かで倒れて了ふ——さうだ、其處で俺は死ねるんだ。——フン、死骸は鳥と獸とが食つてくれらア——丁度似合の死に態だ——と、頭の中で呟きながら山へ山へと入つて行つた。懷中には金が四五十錢残つてゐた。「俳句手帳」と「鏡花小品」とを持つてゐた。

一晩は山の中の一軒家に泊つたが、次の夜は歩いたり樹の根に臥たりした。腹が減つたら水を飲んだ。そこらに生えてゐる蔦や蕨に似た草だのを喰つた。衣服は土と苔とで痛快に汚れてしまつた。そして三日目の朝、別段行倒れにもならず伊豫の別子銅山へひよつくり出た。

別子銅山へ出てから、ふと「此處の地の底で獸のやうに働いて見ようかしら……」といふ氣になつた。で、事務所の様な所へ行つて「使つてくれ」といつたが「そんな體で働けるものか」といつて斷はられてしまつた。

それからまた、ふら／＼歩き出した。しかし、其時から妙に死ぬ氣はなくなつてしまつた。

「乞食のやうに漂泊しながら生きてゐるのも面白い」といふ様な氣持も起つて來た。ある時は木挽小屋へ寝かして貰つた。巡禮が飯を呉れた事もあつた。乞食少年と一緒に家の軒端の積糞の上で寝た事もあつた。一文なしで木賃宿へ泊り込んでたらふく飯を食つたが、翌日金がなくとも警察へ突き出されもせず、それどころか掘り飯まで持たせて外へ送り出して呉れた様な事もあつた。夜中にお寺へ飛込んで「泊める事は出来な」といふ坊主を怒鳴り散らし、その厨にあつた一本の大根を掻つてくらつて、それを喰ひながら夜道を歩いた事もあつた。田舎廻りの浪花節語りが一晩泊めてくれ、そして、なけなしの金を十錢くれた事もあつた。——こんな日數を重ねて、四五日目の黄昏どきに讃岐の丸龜へ出た。

空には夏の月が涼しく浮んでゐた。町々では、皆な門先に床几を出して浴衣がけの男女が團

扇を手にして納涼んでゐた。その眼の先きを、衣服は泥と苔とにまみれ、陽に焼けた垢に汚れて
瘦せかけた男が、凹んだ氣味の悪い眼を輝かせつつ往つたり來たりする。——人々は間もなく
眼ひき袖ひきしてささやき始めた。氣味悪さうにそつと顔を覗かうとし、僕の眼にぶつかるよ
「はつ」と驚いた様に横を向く。或る町通りでは、男女の子供が四五人で「泥棒や、泥棒や」
と小聲でささやきながら後からついて來た。そして、僕が後ろを振り向くと「わつ」と叫んで逃げ
て行く。「ほら、また來よつたぜ、氣味の悪い。今夜はうかつに寝られへんぞい」といふ様
な言葉も耳に入る。しかし、恥かたさ、悲しさ、情けなさなどといふ感情は微塵も起らなかつ
た。そんな感情は既に通り越してしまつてゐた。筆にも言葉にも現はし得ない悲痛な感情が、
體中一ぱいに澄み渡り、汗を流して來るのを感じられるだけだつた。かくて僕は、町中を往きつ
還へりつ、それ等の人間を眺め廻しながら心の中で叫びつづけてゐた。俺が氣味が悪いのか。
俺が恐ろしいのか。こんな風で生きてゐる人間を見るのが恐ろしいといふのか。それで町中が
今夜は寝られないといふのか。馬鹿奴、うじ虫奴！　ざまを見ろ！　だ。——ああ、俺にもこ
んな力があるんだ。力だ、力だ！　憎惡の力だ！！

悲痛な感激の力が凡て眼へ凝集してくる。その眼でちつと奴等を睨みつけてやる——。と、
恐怖に震はれた様におどおどした顔つきで横を向いて了ふ——。その時、僕の腹の底から何ん
とも言へない悲痛な快感と微笑とが湧き上つて來た。と、それと同時に、ある痛快な考へがフ
ト頭に閃めいた。僕は、二三町先きに交番所のあつたのを思ひ出し、其處へ向つて突如として
馳けつけた。そして、僕は査公の眼を見つめながら言つた。

「僕は浮浪人です。拘留してくれ給へ！……いや、僕は狂人ぢやありません。眞面目です。僕は
自殺をやり損つて浮浪しながら土佐方面から此處へ今日の夕方に流れ込んで來た人間なん
です。この町を僕がうろついてゐるので、町の人々がよう寝ないんです。泥棒に入られやしな
いか、放火でもしやしないか、と思ふんでせう。夜も更けてくるのに、まだ多くの人が眼ひ
き袖ひきして騒ぎながら門口にぞんぞんと寝ないでゐます。僕は奴等のこころを覗きつづ
き可哀さうにさへ思へてくるんです。で、貴官は僕を縛つて、そして奴等の眼の前を通つて僕を
警察へ連れて行つて下さい。さうすれば、奴等も安心して寝るでせうから——」

その時の僕の眼は、燃え狂ふてゐるやうで、冷たく澄んで光つてゐたことと考へる。恐らく、
口邊には引きつる様な微笑も浮んでゐたに違ひない——。そして、腹の中でこんな事を考へて
ゐた。

「僕は縛られて奴等の前を通る——。その時僕は奴等に斯う言つてやる——。おい、これでや
つと安心して寝られるかい……これで安心出来るのかい……安つばい奴等め、寝ろ、寝ろ、芋
虫が引つくり返つたやうになつて寝ろ！！……」
しかし、巡査は笑つて取り合はなかつた。

「まあ、氣を静めなさい、どうしたんです、これから何處へ行くんです？」
と、極く穏やかに、親切に、なだめるやうに種々と訊ねにかかつた。僕は妙に張り合ひ抜け
がしてしまつた。

すると奥から一人寝ぼけ眼の巡査が起きて來た。そして、「何だ、何だ、大變なことを言ふ奴
ぢやないか。狂人だよ君、そんな奴の相手になるな——おいこら、出て行け、出て行かんか！」
と僕に言つた。僕は黙つて再び外へ出た。

それから直ぐ、「今夜泊めてくれ」と警察へ入つて行つて、大ころの様に大道へ投げ出され、
蹴飛ばされた。夢中で、波止場へ馳けて行つたが、足下の崖の下に「ばさつ」といふ投網
を打つ音を聞いて死ねなくなつてしまつた。それから——

僕は、この時の漂浪を振り返つて反省すればするほど、それが如何に僕の精神上の根深い轉
換期であつたかを思はずには居られない。多情多感で、激し易い、氣の小さい、弱い僕が、益
益その「悲痛なる感激」を求めて、さうした感激の中にのみ生き甲斐を感じる様になり、その
「悲痛なる感激」の中に一種の「快感」をさへ覺ゆる様になつて來た姿を、まぎ／＼この漂
浪の中に認める事が出来る。僕はかくて後、自らの體の中に、謂ゆる正義、謂ゆる道德、謂
ゆる宗教、などに對して敢然として闘はんとする力が湧いて來たのを覺える。

問もなく僕は、社會主義運動に全身を打込むやうになつた。社會主義學説は、僕の闘はんと
する敵が、凡てその根を資本主義經濟組織の中に植え込んでゐる事を教えてくれた。且つ、そ
の中から、新しき意義のあるものを創造せんとする無産階級の力が躍頭しつつある事をも教へ
てくれた。殊にサンチカリズムの主張は、僕の闘ひの喜びを深化してくれた。それは個性を主
張する諸思想と相俟つて「力の哲學」を與へてくれた。

大杉は叫んだ。「闘へ！　力を讃美せよ！　動的に闘へ！　歴史を創造せよ！」と。大杉の
全身には偉大な力が溢れてゐた。彼れの闘ひは能動的であつた。が、その驍尾に附してキイキ
イ聲を揚げつづつた僕は、反對に非常に反動的だつた。華やかな動的な美よりも陰惨な憎惡美
が嬉しかつた。僕の讚美する力の中には、秘かに「悲痛なる感激」と「悲痛な快感」を多量に含
めてゐた。

尤も、大杉の強い感化によつて、僕の「女々しい悲痛感」はよほど取り除かれて來た。し
かし、その多分は先天的な性質であり、且つ、子供の時分からの境遇によつて育つて來て
ゐる此の「悲痛な感激」を求める感情は、中々どうして無くなつてしまひはしなかつた。

悲痛な感激を求める……これは僕の性情が如何に感傷的で弱々しいかを證明するものだ。
僕に若し幾分の「強さ」があるならば、それは後天的な、感傷的氣分に徹することに依つて附

加された「強さ」だ。残念ながら、僕はこんな男なのだ。弱い男なのだ。

自己を眞に強く生かさんには、自分で自分を欺いてはならない。自分自身をはつきり知らなければならぬ。

僕は飽くまで、悲痛なる感激を求めよう！そこに快感を握ろう！僕の眞當の力は、この悲痛なる感激からのみ湧いてくる。

弱き者よ！その弱さに徹せよ！！だ。

——大正十四年四月二十一日——

句作のおもひ出

考へて見ると、僕の半生には、俳句といふのがかなり深い關係を持つてゐる。

僕が初めて俳句を作つたのは、忘れもしない、十三の年の春だ。僕は十二の秋に大阪の北濱の木田といふ親戚の家へ丁稚見習として預けられ、そして翌年の春、日露戦争の旅順陥落で、例の「えらいやつちや、えらいやつちや」といふ大騒ぎの最中に、木田の向ひの阪崎藤兵衛といふ株式仲買店へ正式の丁稚に住み込んだ。そして、其の年の紀元節の朝、珍らしく大雪が積つた嬉しさに、店の掃除も何にも打つちやらかして、表で近所の丁稚と共に雪投げをしりやうな遊びをして遊んでゐて、番頭にうんと叱られた。その時、

大雪で國旗出すのも忘れけり

といふ十七文字を通ねたのが、そもその始まりなのだ。

やはりその頃だつたと思ふが、一日番頭の自宅へ留守番に行き、留守賃に貰つた菓子ですつかり喰べてしまつても、まだ／＼喰ひ足りない所から、其處ら中を開けて物色を始めた處、簞笥の上の開き戸の中に、立派な箱に入つた饅頭が見附かつた。で、それを一つ盗み喰ひをやつ

た處が、どうしても一つでは止められず、十個以上あつたのが僅かに三つしか残らなくなつてしまつた。そこで、紙片に、

言ひ譯けの爲に饅頭三つか

と書いて菓子箱の中に入れて置いた。その夜、番頭の歸つて來た時には發見されなかつたが、明るる日、その番頭が出動すると同時に店中へそれを披露したので、皆んなから大笑ひをされた。こんな風で、丁稚時代の僕は、何處か滑稽味のある變な小僧に人々から見做され「久吉」といふ本當の丁稚名を呼ばれずに「久兵衛はん」などといふ親爺臭い仇名をつけられて「懷手の久兵衛」だの「蛸久」だのと呼ばれたものだ。

僕は、夜、丁稚ばかりの通ふ「實業補習學校」といふのへ通つてゐたが、其處で友達から借りて讀んだ金港堂發行の「少年界」といふ雜誌を馬鹿に面白く感じ、毎月購讀するやうになつた。そして、出鱈目の俳句や和歌を投書して胸を躍らせてゐた。その雜誌に「夏の遠足には山と海と何づれが優れりや」といふ討論文の課題が出て、それへ「竹外道人」といふ名で應じたのをいまだに覚えてゐるが、十三の小僧が「道人」は振つてゐるぢやないか。

その當時、店の外交員に、今川永三郎といふ人があつて、その人が「久兵衛はん、俳句が好きならこれを讀んで見なはれ」と言つて「ホトギス」の合本を見せてくれた。そして、いろいろ俳句の作り方や、季題のことや、月並の俳句と子規の唱へた俳句との相違なんかを、暇さへあれば僕に教へてくれた。それから、俳句といふものを眞當に知り度くなり、内藤鳴雪の「俳句入門」、河東碧梧桐の「俳句初歩」、寒川鼠骨の「俳諧歳事記」、高濱虚子の「俳諧馬の糞」なんどを始め、古人の佳句を集めた「俳句大觀」や、「蕪村句集」、「俳諧七部集」、子規の採録編輯した「春夏秋冬」などを「お前は少しも貯金をしない」と主人に叱られながら、隠れ／＼と買つて來ては耽讀した。

今川氏は俳號を光躬といつた。そして「僕はホトギス派の虚子の句が一番好きで、古人では太祇の句が好きや」といつてゐた。僕はこの人から「錦江」といふ俳號を付けて貰つた。故郷明石の錦江城からとつたのだ。この時分に光躬氏に批評して貰つてゐた作句のうちで、今記憶してゐるのは、

初蟬や草の匂ひに木の匂ひ

若竹の根岸閑なり晝の鐘

憂き郎を待つ身となりて鮎の桶

の三句だ。「初蟬」の句は信貴山へ登つた時の實感から得た句なんだが、後との二句は全然の拵え句だ。「若竹」の句は、子規に「鶯や簾の根岸——」何んとかいふ句のあつたのを眞似て拵えたので、當時は根岸がどんな處なんだか全るで知らなかつたのだし「鮎の桶」の句は、何に

かで讀んだ「憂き郎を待つ」といふ言葉が使つて見たくて拵えた句だ。十三や四の小僧に「憂き郎を待つ」女の心なんか解つて堪つたもんぢやない。

僕は十四の暮に、再び元の木田へ呼び戻された。この親戚は現物屋だつたが、僕は十五の春から羽織を着せて貰つて自用俵で華客廻りをやらされ、そして、それが何よりの見得であり、得意でもあつた。御芽出度い小僧だつたのだね。

その頃から新聞の募集俳句に、ぼつ／＼投句を始めた。大阪朝日には松瀬青々が、大阪毎日には安藤様面坊が、大阪新報には青木月斗が、そして、大阪時事には水落露石が、大阪日報には吉田笠雨が、各々選者として壇を構えてゐた時分だ。僕は朝日の青々に時々投句したが、めつたに選ばれた事はなかつた。と、或る日、大阪日報の俳壇の傍に、當時その投句家であつた白花蛇、吾始星、虹衣郎などいふ人々の同人雑誌「サエズリ」の廣告を見出した。早速白花蛇君を訪ねて雑誌を買つた。彼は、僕の手帖に書き附けた句を見て種々と批評し教へてくれた。「紺紙五句集」といふものを見せて、これの同人になつて研究しろと勧めてくれた。又「芋虫會」といふ運座を毎月開くからそれに出席し給へ、俳句雑誌は、東京の「ホトギス」、大阪の「寶船」、京都の「懸葵」、秋田の「俳星」、などが代表的なものだと教へてくれた。これが、僕の俳壇へ首を突込んだ第一歩だつたのだ。

白花蛇君の家は、淀屋橋南詰を南へ入つた東側で「まるたつ足袋」といふのを製造して賣つてゐた。その真向ひに岩出といふ時計屋があつたが、其處の主人が當時大阪で三四人しか残つてゐなかつた幸徳時代からの社會主義者岩出金次郎君だなどといふことは、その頃はまだ夢にも知らなかつたのだ。

「芋虫會」「紺紙五句集」時代の僕の俳句で記憶してゐるのは、

時鳥 保津の水 かきまさりけり

腰下ろす冷めたき石や夏木立

恐ろしき浪の音聞く炬燵かな

くらひのものだ。前二句なんかは、固定的な季節趣味に囚はれた凡々たる句だが、先づこの邊の程度だつたのだ。

當時、各地方には、初心者に手ごろな小俳誌が随分あつた。埼玉の「浮城」だとか、伊賀邊から出てゐた「朝月」だとか、まだ薄山あつた様に思ふ。そしてそれに加へて、全國的な「五句集」「十句集」の類もずいぶんあつた。僕はそれ等へ時々投句してゐた。殊に五句集には、地方に於ける未知の俳友と親しみ得る嬉しさに、かなり廣くのものに關係してゐた。すると或る日店へあつしを着て自動車に乗つた小僧さんが僕を訪ねて來た。そして懷中から一つの五句集をとり出したが「この五句集が君の處へ廻す様に指定してあるので、近づきになりたい爲めに

郵送せずに持つて來た。僕は木村虎之助といふもので號を浮塵子といひ、土佐堀の辻本合資會社に奉公してゐる。君は知らないか知らぬが、僕の店の中番頭に龜田小姑といふ俳人がゐる。かなり知られた人で、年一回の「糸瓜」といふ俳誌を發行して居り、癖三醉、三允、柑子、などが群居してゐる「アラレ」といふ俳誌の特別同人で、且つ選者だ。一日十五日は休みだから遊びに來ないか」といふ。二人は直ぐ嬉しい友達になつてしまつた。共に同年輩であり、共に俳句の愛好者であり、共に人の家に使はるゝ丁稚小僧である。二人は間もなく各自の身の上さへ打ちあけ合ふ仲となつた。

その内に、小姑庵の小集に招かれて出席した。其處で「鹿鹽會」の荊棘、宵蛾、泰洋などと相識り、年刊「糸瓜」も貰つた。糸瓜に並んでゐる、櫻碗子、八重櫻、松濤樓、波空、黙語碧童、六花、などといふ人々の句の新鮮な閃きに感心した。そして、この人々は「日本人派」と呼ばれて、雑誌「日本及日本人」に碧梧桐が選する「日本俳句」欄や、句集「續春夏秋冬」の諸星であることも其夜はじめて聞き知つた。殊にその夜見せられた「續春夏秋冬」中の、

草 囀 め ば 甘 し 蝶々 飛びにけり 櫻碗子

といふ句には、最も感銘を與へられた。

僕はその時既に、前記の「芋虫會」に出席するやうになつて以後、月斗、墨水、鬼史、などいふ謂ゆる元老達とも知る様になり、大阪に於て最も歴史的の俳句會といはれた「満月會」にも出席して、露石、青々などをも見知り、心中大いに得意がつてゐたものだ。處が、その夜の小姑庵小集に於いては、これらの元老達が盛んに話題に上つて、皆な、平凡陳腐の輩として罵倒された。僕は太に驚いたが、しかし「續春夏秋冬」や「日本俳句」欄の句を見せられて、成る程と、共鳴を覺えずには居られなかつた。

僕は二三日經つて、號を「醉蜂」と改めた。

さうかうする中に、大須賀乙字が「アカネ」紙上で季節趣味打破論（だつたと思ふ？）を唱へ出したのが動機となつて、碧梧桐が「日本及日本人」紙上に「新傾向句」を高唱し始めた。それは從來の型にはまつた五七五の調子に囚はれず、もつと自由な七五五の、五四四五五のその他の新律調の表現法が現はれ來つたこと、及び、從來は俳人仲間には季節に關する一種の約束的な固定趣味が尊重されて居たのが、漸く其處から脱出して新境地に進まんとする傾向が見え來つたこと等を捉え來つて、此の新傾向へ努力を促がしたものである。その囚はれた季節趣味打破の例句として、

火を燈れば陰火と映ず清水哉 泰山

雁鳴くや帆に一杯の赤い月 失名

野菊我れはかゆきかくゆく君見居る 春又春

などが掲げてあつたと記憶する。雁と云へば淋しい悲しい思ひを表はさねばならぬもの、清水といへばその清澄な涼しい趣きを詠まねばならぬものといふ様な固定觀念にのみ支配されてゐる俳壇に飽き足らなかつた新人にとつては、これ等の句は確かに新方面を示してくれた處の一驚異だつたのだ。

かくて碧梧桐派の新傾向句は、碧梧桐の第三次全國的俳行脚の努力と相俟つて、忽ちにして全俳壇を風靡した。地方の小俳誌は殆んど廢たれ、皆な競つて「日本俳句」欄の投稿家となつた。當時「日本及日本人」の發行きの半数以上は俳句のためだなどさへ噂された位だ。子規の遺棄たる「ホトトギス」は、虚子を始めとして小説、寫生文等に力を注ぎ、俳句は火の消えたる如く、東洋城、零餘子、松濱、鬼城など、まるで顧みられなかつた。露月、へき、五工、等の秋田の「俳星」はこの以前に没落し、三允が主力を傾けて「野村家碧梧桐」を攻撃しつつあつた「アヲレ」も、間もなく廢刊してしまつた。ただ、京都の「懸葵」は、句佛上人の金力と碧梧桐の行脚句を發表することによつて僅かに餘命を保ち、大阪の「寶船」は、青々をとりまく少數の人々が固く閉ち籠つてゐるに過ぎなかつた。

新傾向派の風靡は、碧梧桐崇拜へと移つて行つた。碧梧桐は「碧師」と仰がれ、彼れが中村不折より六朝書風を學んで書し始むるや、猶も杓子もそれを眞似た。龍眠帖（不折の習字手本だ）と龍眠筆とを所持し、折釘流の文字を書かねば俳人ぢやないといふ様な騒ぎだ。僕も又、この渦巻にまき込まれた。

十七歳の夏、僕はまた木田商店を去つて再び仲買店の尾島愛藏方へ帳場附となつて住み込んだ。

同年の冬、碧梧桐は更らにその「日本及日本人」誌上に於いて『無中心點主義』を主張し始めた。そして、

雨の花野來しが母屋に長居せり 響也

といふ句を例に掲げた。句に中心點といふものが長い。此處といふ視ひ處を掴まへた句ぢやない。しかも、そこに時間的な、ゆつたりとした作者の生活から來る氣分が、この句を読む者に浸々と感じられる。といふ意味のことを碧梧桐は述べてゐた。そして猶ほそれを説明するために、最も自然的無中心點的な劇としてゴルキーの『ドン底』を例に引いてゐるのを、僕は感心して讀んだ。

その翌年頃から「日本俳句」欄には備中玉島の「碧樓」、響也の兄弟の句が異彩を放ちだした。いま創作界の大家となつてゐる久米正雄の三汀が、美麗な句をそこに輝かせ始めたのもその頃であつた。又、井泉水は別に自ら「層雲」を發刊して新境地を開くべく努力を始めた。續いて、碧梧桐が俳行脚の足を大阪へ踏み込んだ。講演會、大會、俳三昧などが開かれて、

關西俳壇は眼まぐるしい程の盛觀を呈した。そうしてゐるうちに、文壇にはイブセンなどの個人性を強調した作品が迎えられ、思想界ではベルグソン、オイケンの哲學が紹介されて直觀だとか個性だとかを喋々と始めた。その同じ潮流が、俳壇へも流れ込んで來た。そして「個性」「直觀」「氣分」などといふ言葉は句評の字に重きをなして來た。大阪の俳人間にも「白樺」「スバル」なんかを手にして新しい文學を論ずる青年が殖えて來た。そして、斯ういふ青年を中心にして「紙衣」といふ俳句雜誌が發行された。同人は、射穿、遊魚、草迷宮（いま玄文社にある佐竹聞一郎だ）、花影公、章四知、雪妬、雪骨、柴折（小説家になつた瀧井孝作だ）それに僕も加はつてゐた。そして、東京からは天郎、三汀などが應援してくれてゐた。

しかし此の「紙衣」は、さした足跡も残さずに五六號で廢刊してしまつた。この時、新傾向派の「個性味」の深化への運動は、次第に選者無用論を呼び起すこととなり、諸所に個人雜誌が刊行された。そのうち最も注目せられたもので、神戸の川西和露の「×××」と、岐阜の鶴平及びそこに同居して百姓をしてゐた董説とが出してゐた「土」の二つだ。殊に「土」は、董説の力強い作風によつて讀者の眼を注がれてゐた。そして僕は、斯く、俳壇の傾向が益々個性の深化へと志しつつあつた時、梅毒性の神經衰弱と生活上の不安とに堪え兼ねて、土佐の碧海へ身を投げに旅立つた。この自殺は未遂に終つたが、しかしそれが精神上の大なる一轉機となつて、斷然たる生活手段の變革を企つると共に、また俳句も捨ててしまつた。

僕は俳句を捨ててから、丁度今年で十三年になる。この間差入になつた或る本の扉に、碧梧桐と井泉水との近作らしいのが四五句載せてあつたが、讀んで少しもいいとは思はなかつた。俳壇の潮流に遇くれてしまつたからかな？

僕は自分の句を對紙に清書して綴ぢ込み「醉蜂句集」と銘じて種々の古い寫眞なんかと一緒に國の母に預けて置いて置いた様に思ふが、恐らく失くなくなつてしまつたらう。

謂ゆる新傾向派の一句黨（投句の中から、時々御情けの様に一句載せて貰ふのを光榮とした連中）だつた時分の俳句は、いま殆んど思ひ出せない。ただ四十三四年頃、

隱れ住む手折れ角力や 缺の聲

といふ句がやゝ得意だつたのをかすかに覚えてゐるのと、無中心論者の盛んだつた頃に、

一坐あちらこちららの温む水に向く

といふ句を作つたのと、碧梧桐が行脚の時に作つた俳三昧の句の中から、

壁石に文字ありと遊蕩人の見て
といふのが「續日本俳句鈔」の中に載せられたのを覚えてゐるつきりだ。句を捨てる極く間際に、神戸の魚堂と、生田の森、應取山の邊りを吟行した時の句に、

その荒壁の主は鶏頭節くれて

といふのがあつた。随分きこない調子の句だが、句のよしあしは兎に角として、その當時の句風がよく現はれてゐると思ふ。單なる自然の描寫に飽き足らないで、そこに深い主觀の内在力がにじみ出てゐねばならぬと主張されだした時の句なのだ。

後年、社會主義運動に没入して、東京市役所の道路人夫なんかやつてゐた時分に、

俺が脂も浸めよと銅貨握りたる

煙管のやにの流るゝまゝに老ひしなれ

金魚掴み殺したる性慾の惱み

馬は暖かに尿す銀座の柳かな

といふ様な句をフット作つた事もあつた。それからまた三四年経つて、大阪で勞働運動社の支局をやつてゐた頃だつた。一日堀江を歩いてゐると、とある大きな寺の表に「碧梧桐氏歡迎俳句會」といふ貼紙が眼についた。その日は幸ひ尾行をまいてゐたので、馬鹿に懐かしい様な氣持ちになつて早速入つて行つた。來會者二十人ほどだつたが、舊知の顔は碧梧桐の外に遊魚青蛾、木染月の三人位いなものだつた。皆な珍らしがつて迎えてくれた。僕は別に句を作る氣もなかつたが、前記の入夫の時の句を二三投じて見た。誰れも選んだものはなかつたが、只一人碧梧桐が「煙管のやに」の句を選したのを見て、一種の快心味の加はつた苦笑を覺えた事もあつた。

こんど入獄してから、たいくつまざれに俳句を作つて見ると、また面白味が湧いて來た。がこの頃は、鐵窓の御蔭げと見えて平凡な句が嬉しい。

きりりほたり雫す春のおもみ哉

——大正十四年四月九日——

野郎、泣くな!!

『野郎、また泣き始めやがつたな。だら／＼と、涎と泪とを垂れ流してゐるやうなあの聲で、また泣き出しやがつたな。——』

『なにが悲しいんだい。何にを泣きやがるんだい。入浴の時ちよつと見たが、立派な體格をしてゐるぢやないか。骨組みもがつしりしてゐるし、背も五尺四五寸あるぢやないか。年だつて廿五六にはなつてゐるさうぢやないか。その體格で、その面ら構えて、何んてえ情けない聲を出して泣きあがるんだい。糞面白くもねえ。曇つた日だの、薄闇が這ひ込んで來る頃になると、きつと泣き出しやがる。——』

『泣いたつて、泣かなくつたつて、監獄は斯んなものだと言から相場はきまつてゐるんだ。じめじめ野郎奴、泣くんなら泣くで、胸が張り裂けて、飛び散る血のしぶきが壁に流れるほどの眞剣さで、命懸けに泣いて見ろい! 同じ泣き聲でも、ちつたあ、聴き難えもするといふもんだ。——』

『未だ泣いてゐるな。未だ、あーあー泣きやがるんだな。革手錠をはめられたんで、今日は一層泣きたいんだらう。梅雨野郎奴!! 貴様がめそ／＼泣いてゐるからな、若しぶらんこ往生でもせられぢやないかといふので、親切に保護して下さるんだ。革手錠で護つて下さるんだ。泣く手間でお禮でも申上げろつて看守は怒つてら。若し貴様が首でも吊つて見ろ、擔當看守は直ぐアゴが干上るんだつてよ。——』

『泣くな!! 野郎!! いつまで泣きやがるんだ。止せ! うるせや、うつとうしいや。そんな嫌やな聲はな、今日此頃の雨だけで澤山なんだ。貴様の近所に居るものはな、皆な、毎日毎日いろんな妄念に悩まされてゐるんだ。惱ましい、悲しい、いらだたしい、妄念が、暗闇の中で顔や手にまとひつく蜘蛛の巣のやうに、其の頭の中へまとひついて苦しんでゐるんだ。それをちつとでも除いて、身を大切に保たうと、靜坐したり、讀書に耽つたり、雀に親しんだりして、もがいてゐるんだ。欠伸や、暖拂ひを交し合つて、顔さへるくに見えない同志が、親しみ慰め合つてゐるんだ。それを、それを、たださへ氣の滅入る雨の日や、薄暗の這ひ込んで來る夕暮なんかに聲を立てて泣き出されて堪るか。ちつと聞いてゐられるかい。馬鹿野郎奴!! くらばつちめえやがれ!!』

——大正十四年六月三日——

大杉の個性教育

大杉は、色の黒い、がつしりとして背の高い、眼玉の特別に大きい、脂濃いものの好きな、精力旺盛な、口中の臭い男だった。

大杉は極めて個性の強い、従つて或る場合には極めて傲慢な男だった。それだけに又、他の個性を最も尊敬し、個性のない人間を輕蔑した。

僕が「労働運動」の記事を書き悩んでゐると、まあ休んで茶でも飲めよ、と言ひながら、大杉はよくそんな時、難談を旺んにやる。そして、僕が難談に調子づいて何んかを喋つてゐると彼は急に起ち上つて『よし、その事を書くんだ。君が今話したことを、その氣持のまゝで書くんだ。さうすれば直ぐ書ける。そちらの書き癖は破つちまへ』といふ。そして、ぶいといふ自分は仕事を始める。

『だつて、まとまつちや書けないよ、もう少しよく考へて——』といふと『そんな馬鹿を云ふな。自分は學者ぢやないんだ、自分は労働者だと叫びながら書くんだ。間違つた事を言つたつて何んだつていゝから、氣持のまゝを書くんだ。君が今、一寸喋つた事は面白いよ。喋つた事が書けないつて法があるか。笑はれるかも知れないなんて、卑怯な事を考へるな』と怒鳴る。

怒鳴られて僕も癪だから「畜生!!」と心で叫びながら書きなぐつてしまふ。すると大杉はそれを見て『そうれ見ろ、こんなに立派に書けたぢやないか』と云つてニコ／＼笑ひながら、文章なんか一寸手を入れてくれる。で、僕も嬉しくなつて、だん／＼勇氣が出て来る。自信もついて来る。

大杉は、決して説いて教へなかつた。自發を促してくれた。萬事、かういふ調子で、僕を教育してくれた。

或時、大杉は僕の小さな原稿を見て『駄目だ!! 俺の言葉を眞似ちや駄目だ。自分の調子で書け』と言つて、ピリツと引裂いてしまつた。僕は其の時、怒つて大いに議論した。そして敗せさせた。が、大杉のこの心遣ひは、ほんとにしみじみと嬉しかつた。彼は、それほど個性を尊重した男だ。

——大正十四年八月五日——

村木源次郎君の追憶

◇ 今日一月廿四日だ。僕等の運動の第一頁に、ドス黒い血を刻した、その記念日だ。村木がその同じ一月廿四日に獄死したことは、因縁などといふ、笑ふべきたわ言のあるが爲めではない。素より、これは單なる暗合である。が、しかし、僕はその偶然的暗合によつて、更に感激を深うする。

村木は、僕とは違つて、徹底したアナキストであり、且つテロリストであつた。

大正七年の初夏、彼は本郷臺町の延島の家で、病の爲めに殆んど死にかけてゐた。が、その日は彼の氣分が非常に好かつたので、僕は枕もとで古い「平民新聞」だの「自由思想」だのを讀げながら、彼と難談を交へて居た。村木はいろ／＼と赤旗事件當時の話だの、大逆事件當時の話をきかせてくれて居た。やがて彼は、古い寫眞を取り出して來た。その寫眞には、幸徳秋水、菅野幽月、新村忠雄、福田武三郎、百瀬晋、及び村木とが寫つてゐた。彼は新村を非常に好いてゐたらしく、新村のことを褒めて話してゐた。

次に、十二人の寫眞を取り出して來た。そして「この新村の肖像は、顔は新村だが、體は僕なんだ。新村のは、顔の寫眞しかなくつたので、僕の體に首をとり代へて作つたのだ」と、如何にも嬉しうに話してゐた。それから、押入れから、一つの風呂敷包を出させた。開いて見ると、中から、紋付の衣類と六尺の晒が一本と、短刀が一振り現はれた。

『これが僕の精神で、そして死装束だ。病氣で死にたくないと思つてゐる!』と言つた。(この紋附は、後ちに、魔子が奪さうだからといつて、仕立て直して着せてしまつたと覺へてゐる)

彼は又、襪先きの柱を指さして淋しく笑つて見せた。で、振り向いて見ると貧弱な一枚の短冊がそこに貼り付けてあつた。

淋しさや秋の水追ふ蝶一つと細い字で書いて、下に「源」としてあつた。

◇ その少し以前、まだ村木が、寝たり起きたりしてゐた時分の事である。

僕は、その當時、龜戸で大杉、久板と共に「労働新聞」の發行に熱中してゐた。それは第一號から實にひどい壓迫で、大杉の謂ゆる「ジゴマごっこ」を盛んにやつてゐた。又、さうしなければ、とてもまともに發行は出来なかつたのだ。で、度々、臺町の延島の家を利用しては、

その家の後ろの塀を乗り越えて籠抜け式活動をやつてゐた。従つて、その家は、大いに警察から注目しられたものだ。

「労働新聞」の第四號が秘かに發行された。それは直ちに禁止され、八方捜査されたが、全るで出て來なかつた。本富士署の高等が、臺町の家を襲つた。家には、村木と伯母さんときりだつた。

「労働新聞をこゝへ持ち込んだ筈だから、出してくれ。」

と、高等がいふ。村木はニコ／＼しながら起き上つた。

「それは御苦勞さまです。けれど持つて來ませんよ。しかしお役目ですから捜して下さい。さあお上りなさい。」

斯うやさしく言つて、二人の高等を誘ひ上げ、自ら先きに立つて、そこら中をあけ放して見せた。そして、戸棚から、布團を下ろさうとさへした。この態度にすっかり氣を呑まれて、安心しきつた高等は、

「いや、そのまま、そのまま、……何あに、此處には無いとは思つたのですがね、何しろ警視廳から喧ましくいふものですから……。」

と、きまり惡さうに言つた。そして、お茶とお菓子によばれて、

「村木さん、お大切に……。」と言つて歸つてしまつた。

その、村木が開放して見せた押入の、ふうわり布呂敷が懸けてある下には、二千部からの新聞が隠れてゐたのである。村木の人物を知つてゐる人々は、彼のこの態度の中に、村木そのものが如實に囚めてゐることを感ずるだらう。

◇

社の、下の火鉢を圍んで、三四人が雑談に耽つてゐた。僕が、何にげなく傍にあつた古雑誌の頁を繰ると、赤インキで種々な樂書のしてあるのが眼に留つた。その樂書の中に「汝に若し芥子粒ほどの信仰あらば、山に命じて海に入れと言へ、直ちにその如くならん」といふのがあつた。ヤツ嫌ひな僕は、その筆者の川口に對つて早速野次り始めた。

「チエツ、何んだこれは……好い氣なもんだなア。なるほど、人間も此處までのぼせ上つて狂人になれば、天國とやらへ行けるだらうよ！」

川口は、例の調子で、やつきとなつて應戰して來た。僕の毒舌もだん／＼激しくなつて行つた。と、臺所の傍の三疊の間に寝てゐた村木が、手にしてゐた講談本を投げ出して起き上つて來た。

「川口君しつかりやり給へ。が、君のやうに理窟を言つちや駄目だよ。」

から言ひながら、村木は僕の方へ向き直つた。

「和田君は、この言葉が解らないかね……。だから労働運動にばかり一生懸命になつたり、大

杉の白紙主義に共鳴したりするんだよ。これは理窟ぢやない、信仰さ。この言葉こそ、無政府主義の神髓さ。革命家は、皆なこゝろに信念を持つてゐるよ!!」

彼は、言ひ度い事だけ言つてしまふと、また、ふいと三疊へ引込んでしまつた。そして、炬燵にもぐり込んで講談本を澄ました顔して讀んでゐた。僕は、

「ハハ……村木にはかなはないや——」といつて笑つてしまつた。

◇

「労働運動」の、何號かの編輯の時である。僕は例によつて、二階の編輯室で原稿紙にとらめつこをやつてゐた。と、下から村木が、お茶うけの腕手を持つて上つて來た。

「どうしたい、和田君。書き上つたら骨休めに金車亭でもおごらうかね。伯山がかかつてゐるよ。」

斯う言ひながら彼は、机の上を覗き込んだ。

「なあんだ。まだこの「關西労働組合同盟の諸君に檄す」といふ、見ただけかねえ——。驚いたなア、これは君、昨日の朝、こゝへ書きつけたんぢやないか？」

彼れが來たのも無理はない。僕は前日の朝、みだしを書いたきり、ちつと二日間原稿紙とにらみ合つてゐたのである。

村木は、一寸考へてから、直ぐニヤリと笑つた。そして押込から昔の「日刊平民新聞」を引出して來て僕の机の上に置いた。

「君、そんなに苦しんだつて仕方がないよ。僕がいい事を教へよう。この中から、幸徳の書いたものを寫して、それで「労働運動」の全面をうづめ給へ。いいよ！」

「ふざけるなよ——」といつて、僕は苦が笑ひをした。が、その時、ふと、村木の顔の、案外生眞面目になつてゐるのを見て、僕の苦が笑ひも、はたと止つてしまつた。村木は言つた。

「君、理窟は一つだよ。そんなにむづかしく持つて廻つて、文章をこねたつて要は只一つ事だよ。云ふ事は皆んな幸徳がいつてしまつたよ。宣傳は必要さ。が、それは簡單さ。同じ言葉を繰り返し繰り返し言へばいいのだよ。それでいいのだよ——」

僕は、ちつと彼の顔をみつめた。彼はまたニヤリと笑つた。

「イヤ、失敬／＼。まあ大いにやつてくれ給へ、僕は炬燵で講談としよう……」

僕は少し聲を漏らして苦笑した。そして、段梯を下りやうとする彼の後ろから、「村木式だなア……」と、腹の底から大きな息を吐き出すやうに言つた。

◇

「横濱の源ちゃん」鎌倉の源兄イは、黒襟のかかつた着ものや、しほり染の浴衣が大好きだつた。そして彼れは、妙にその遊びに行く先き先きで、直ぐ其處の「内の人」になつてしまふ。他の眞似の出來ない、一種のやはらか味をもつてゐた男である。

僕に、變な江戸趣味のあるもの、半ばは鏡花の小説の影響ではあるが、半ばは村木のお仕込みである。最初、僕を八丁堀や浅草の金車へ引つづつて行つたのも彼れである。

彼れは、もとはクリスチャンである。横濱で社會主義運動に加はつて、そのクリストの信仰はやや失つたが、それを根底から捨てたのは、赤旗事件で入獄して、千葉の監獄でヘツケルの「宇宙の謎」を讀んでからだ、といつてゐた。

しかし、誰れも知る通り、彼は信仰の男であつた。クリスチャン臭い所もやや残つてゐた。毎年、クリスマスには、知人の幼ない子供たちに「贈りもの」をしてゐた。

やはらかい、やさしい、村木を知つてゐる人は多い。が、彼の「澄みきつた底の火力」を知つてゐた人は、或は少なかつたかも知れないと思ふ……。ポオランドの亡命者ボレッキイと、大杉の巢鴨の家で撮した寫眞の顔には、彼の、するどい、強い面影が實に好く出てゐる。あの寫眞は、いま何處かに残つてないかしら……。

大正七年の春だつたかと思ふが、赤坂の臺町(?)に、例の福田狂二が大きな化物屋敷に立て籠つてゐた。そして、その家で「ロシア革命記念會」といふものが催された。その當時としては實に珍らしい會合で、堀、高島、大杉、荒畑といふ顔合せだつたのである。山川さんは、例によつて缺席したと思ふ。三十名位は集つてゐた。

ロシアに第一次革命起るや直ちにケレンスキーを謳歌し、第二次革命起つては、忽ちトロツキーを振り舞はしつゝあつた高島君は、アナキズムでもサンヂカリズムでもない革命が起つた事によつて大熱狂を示しつゝあつた。従つて、彼は當日の大立物であつた。

ロシア革命に就いて、議論が戦はされた。大杉君は、ロシアの過激派の戦術は、アナキストからの借りものだと言つて、いろ／＼例を並べた。そして、高島君から「しかし、勞働者の獨裁は違ふだらう」と野次られて「いや、初期のアナキストの内には、それをすら唱へたものもある」と答へ、「こりや、聞きものだ——」と高島君が嘲笑するといふ一幕もあつた。

皆んなが起つて氣焔を吐き出した。アナキズム一點張りの村木はさつきから高島君をにらみつけてゐた。彼は蒼ざめた顔をして起ち上つた。彼は演壇に立つたが、口を開く前に、感極つたといふ風で、泣いてしまつた。ややつて涙聲を振りしほつて「善徳事件」を論じ出した。と、演壇の下に居た高島君が「ウアハ、ハ、ハ、ハ」と大きな嘲笑を浴せかけた。彼は、きつと高島君をにらみつけて、そのまま演壇を降りてしまつた。

その翌日である。村木君がふところ手をして、ぶらつと日比谷の賣文社へやつて來た。他の社員は皆な二階だが、高島君は三階に陣取つてゐた。彼は、高島君の一人なのを見すまして、すつと三階へ上つた。そして、高島君の机の前に立つて、

「ヤア、昨日は失禮しました。」

とニコ／＼しながら挨拶した。高島君は、變な笑ひを浮べて挨拶を返した。と、その瞬間、村木の形相がさつと變つた。高島君の胸元へビカ／＼したビストルがきつと突きつけられた。高島君は、

「アッ」と叫んで、椅子からころげ落ちた。そして恐怖に慄えてゐた。それを見澄ました村木君は、

「何あに、戯談ですよ、失禮しました。」

と丁寧な、澄まして挨拶して、またふいと歸つてしまつた。

その翌日、彼は、警視廳から呼出されて、ビストルを取り上げられた。そして村木君は幾何かのビストル代を請求して貰つて來たといふ話しだつた。(後半は彼の直話だ。)

——大正十四年一月三十一日——

後事頼み置く事ども

妄執外の妄執

「何んだ、遺言だつて？」などと、讀まない先きから眼玉をむき出しちやいけいない。そんなに「遺言」などと御大層にいふ程のものぢやないんだから。

僕は此處へ來てから、たいくつまぎに俳句をひねる様になつた。歌も作つて見た。萬年筆と原稿用紙を差入れて貰つて、隨筆めいたものを書いて見た。ほんのちよつぱり親父の思ひ出も書けば、自分の略歴見たいなものも綴つて見た。此處彼處への友人へは、かなり頻繁に馬鹿文、與太手紙を飛ばせもした。そして、今後やはり、裁判の大團圓が来るまでは、同じやうなことを、ぐうたらな調子で續けて行くだらう。僕がいま此處に書かうとする『後事頼み置くことども』も、やはり同じ意味のものの連續——一片だと解してくれればいいんだ。

俳人芭蕉が臨終のときの句に、

旅に病んで夢は枯野をかけめぐるといふのがある。彼は最後に近い苦しい息の下から此の句を吐き出すと共に『ああ、如何に

好める道とは言ひながら、かくても猶ほ句を案ずるとは我ながら浅ましい妄執である……』と、歎息して淋しくほく笑んだといふことだ。

僕には勿論、強い妄執がある。さうだ、妄執がある。僕の全身的な戦ひは、單に理想の爲めばかりではない。それは理想の爲めであると同時に、復讐の爲めでもあるのだ。それは、正義の信念と憎悪との混合物なのだ。だから僕は、これを主義理想、正義の信念の力とはいはないで、敢て妄執といふのだ。が、いまは僕の此の妄執に就いて、遺言めいた、最後の雄叫びめいた、ことどもを書かうとしてゐるのではないのだ。僕は現在の社會がどう進化して行きつつあるかを知つてゐる。社會的正義の焔が如何に揚りつつあるかを知つてゐる。資本主義制度の運命が最早や餘命の幾何もない事は明かである。我等の運動は進みつつある。此の上に、今更ら獄中から砂粒に等しい蛇足の聲を附加する必要がある。

『ぢや何にを言ひ残したいんだ？』つてかい。ハハハハ、さう固くしやつちこばるなよ。先づ鹽せんべいでも買つて来ないか。そして茶を飲みながら、皆んなでがやがや笑ひさざめて讀んでくれ。さういふ類ひの『遺言』なんだから——。

つまりこれは妄執の他……さうよ、難念かな。しかし、難念よりは少々意味が強いから、妄執……も幽霊のぐちめいて、ちと變だな。まあいいや、其處のところは、いい様に勝手に解釋して置いてくれ。芭蕉の言つた様な意味でなら、やつぱりこれも妄執の一つだらうが、要するに、自ら歎息して淋しくほく笑んで居られる種類の妄執なのさ。

死體の處分

先づ、死體の處分から頼まう——。

僕の陳述した『死刑希望』を判事が賛成してくれるならば、九月下旬頃、桐の一片の落つるのと共に僕は死體となる。僕は古田君とは趣味が異つて、菊の花は氣高すぎて好かない。そこで桐の一片と共に散ると、一とひねりひねつて閑寂を氣取るんだ。呵々。

が、若し不幸にしてクロボトキンの謂ゆる『ゆるゆるとの死刑』になつたならば、死期は何年かの後に伸びる。そして、死刑が病死に變る。つまり、遅かれ早やかれ、どのみち諸君の御厄介にならねばならないのだ。ゆるゆるとの死刑になつたなら、生きて居られるだけはウジ虫の様な氣持で生きてても居やうが、此の體がそんなに長持ちしないことは、僕に確信がある。で、まあ、いまの中からこんな事も頼んで置かうかと思ひついたので。

自分が死んでからの扱ひがらについてまで兎や角うと空想するなんて、全く歎息に値する妄執だね。しかし、何にしろ監獄の獨房といふ所は、諸君の充分に經驗のあるやうに、立派な事でも、美しい事でも、ゴミ見たいな事でも、何んでもいいから止むときのない走馬燈のやうに、ぐるぐるぐるると考へて居ねばならぬ様にかり立てる所なんだからな。

明日にも死んだつていいと思ふ體でも、やつぱり生きてゐる間は腹も空く、いろ／＼と考へ

もする。だから、こんな事も書いて見る氣が起る。歎息。苦笑。

さて、僕が死體となつたなら、早速解剖に附して貰つて、醫學上の研究に使用して貰ふのも悪くないと思ふ。しかし僕は、帝大なんかで済まし込んで、天晴れ國手で御座いてな面付きをしながら、それ等の發達した醫術の恩恵に預るには餘りに貧乏である多くの人々に、無關心と冷笑とを浴びせつある奴共の手では、どうも解剖されたくない氣持があるんだ。僕は科學を尊敬する。しかし、その恩恵を鰥寡しつある階級を憎むと同時に、彼等有産者階級にのみ忠誠なる御用科學者を憎む。

そこで僕は、自分の死體解剖の如何は、僕の最も尊敬する三田醫院の奥山伸先生にお任せしたいと思ふ。否、お頼みしたいと思ふ。僕の死體解剖が、幸ひにして奥山さんの研究の上に一滴の貢獻たりともなし得るならば、僕は喜んで解剖を御願ひする。執刀者その人が奥山さんであるか否かは問題でない。それに依つて、奥山さんの御恩の萬分の一でも報ずる事が出来るならば、これに越した喜びはない。

後とは灰にしてくれ。若し奥山さんに役立たなかつたら、そのまま灰にしてくれ。

葬式、墓

謂ゆる葬式といふ奴は、要するに親しかつた知人が集つて、棺桶に入れて、焼場へ持つて行つて灰にしてくれれば、それで本望だ。

僕はいま、渡邊の爺さんが死んだ時の光景が非常に心持ちよく眼に浮ぶ。あの朝は、棺桶をとりまいて皆んなで別れの革命歌を唱つた。二人の入夫を頼んでそれをかついで貰ひ、皆んなは棺桶を取り囲み革命歌を唱ひながら、三河島の焼場までくり込んだ。僕は梓繼一枚で、物干竿に赤旗をくりつて先頭に歩いた。歸りは千住大橋まで船で歸つたが、船の中で大いに騒いで、久し振りに清遊をやらかした様に感じた。ああ、僕の時も、あんな風だと嬉しいがなあ——と思ふ。

墓なんか、決して作らないでくれ。尤も、こんな事を頼んで置く必要はないかも知れぬが、ハハハハ、まあ念のため、頼んでおく。

九州の海岸にある、大杉夫妻の墓標石の何處かへでも、小さく刻んで貰へばとも思ふが、しかし、ほんの淡い望みにすぎないんだから、それらでもいい。

死灰の處分

死灰——即ち『骨』と稱するものだ。あれの捨て處に就いて、實は少しめんどうな希望があるんだ。おまけにそれはセンチメンタリズムを加味した處分法なんだが、聞いてくれ。あんまり冷かさないね。

その以前、堺さん達が實文社に立て籠つて、謂ゆる『萬年筆の先きに紙の旗をくつつけた小さい旗上』をする下準備として『へちまの花』と題するペラ／＼雑誌を出したのは諸君も知

つてゐるだらう。確かあの『へちまの花』の消息欄にあつた記事だと記憶するが、高島素之君が愛兒を失つたとき、彼はその愛兒の骨を肥料としていくらかの鉢植の朝顔を作り、知人間に配つた、といふ話しが載つてゐた。僕はそれを讀んだ時、非常に趣味のある、面白いやり方だと思つて感心した。そして、自分も死んだなら、骨なんかこんな風に片附けて貰ひたいものだなあと、獨り考へた。

この事を、いま思ひ出したのだ。で、厄介だらうが、僕の死灰も此の肥料方法で處分してくれまいか。あの世から一と花咲かせて見たいといふ、洒落つ氣さ。鉢は素焼の、四五錢の奴が面白い。しかし、これは忙しい勞運社の人々にはちと氣の毒だから、この仕事は一切、望月家の人々に御願ひしたいと思ふ。あの一家はこゝろふ事は好きだから、いろ／＼考案してやつてくれるだらう。それ等の鉢植ものは『久さんの骨で咲かせたのなら面白からう、貰つてやらう』と言つてくれる人々にだけ分つてくれ。

處で、植える花だが、僕は最も平凡な草花を好む。樹や灌木のやうに裸の幹を残さないで、咲くだけ咲いたら一年きりですつかり枯れて了ふか、根だけになつてしまふかして、來年また土の中から、さうつと青や紅や黃の芽を覗かせる、あの草花を望む。それも、成るべく野原なにかに咲く、極く平凡なのを好む。高島君が植えたといふ朝顔は、僕は餘り好きぢやない。

此處へ僕の好きな草花を少し書いて置かう。いまは野生の草花でないものも少しはあるが……。

春のものでは、

れんげ草 土筆と杉菜 堇 えんどうの花 茅花

夏のものでは

芥子花 螢草 葵 晝顔 かたばみの花 つめきり草 鴨足草 矢車草 撫子

秋のものでは

桔梗 りんどう(紫) 野菊 萩草 蓼の花 月見草 ほうづき 唐辛子(丸い實) 秋海棠

冬のものでは

水仙 石路の花 さふらん

その他、いま思ひ出せないでゐる好きなものが、まだ大いにある様と思ふ。だから、その邊の處は、萬事望月家に頼むからいい様に選んでやつてくれ。

其他の事ども

來信がかなりあるんだが、これは焼捨てるなり、役に立つ面白さうなのが見つければ役立てるなり、凡て近藤憲二君に一任したい。中には、多くの人に見せられたりするのを嫌やがる受信者もあらうから、その邊のところをも、近藤君によりしく頼んで置く。

萬年筆は、しげ子君に進呈する約束をしてゐるんだから、同君に渡してくれ。姫路の方へ遺骨なんか送る必要はない。その事は僕からよく言つてやつて置く。ただ、葬式、萬端が済んだら、その模様だけ一寸知らせさせてやつてくれ。

大正十四年八月四日

同志 諸兄

市ヶ谷刑務所にて 和田 久 太郎

死刑を直視しつつ

ほんの感想

先達つて面會に来て頂いた砌り、『こんどの裁判に對する感想を書いて寄越せ、裁判の結果によつては、君の裁判に對する不信に關せず、辯護士は辯護士としての職責上、不當判決には最後まで法律上の争ひを争つて見たいから、その參考としても、君の偽らざる感想を猶よく聴き度いのだ。』といふ貴君の言葉に對し、僕は、笑ひながら『書けたら書いて見ませう——』とお答へをしておいた。

今日は頭もすが／＼しく何んとなく好い心持ちだから、約束を果す爲めに少し書いて見やうと思ふ。薄く藍をはいた空には、珍らしく朝月が浮んでゐる。露をふくんだ檜の木に枝に風が動いて、蟬さへ涼しく／＼なされる。

だが、此間も御話した通りに、どうも理窟つぽいものは書きたくないから、ただ感想だけを筆の向くままに書きつらねて行くといふに止める。そのつもりで讀んで欲しい。

死刑の賛成

僕は六月二十七日の法廷に於いて、検事君の『死刑求刑』に對して極く眞面目に賛成して置いた。そして、判事君の一片の慈悲心が、或は無期懲役の判決を下しはすまいかといふ事を恐れて、判事君に對して衷心から「無期よりは死刑」を希望する旨を述べて置いたのである。死刑を無期に變へる様なことがあつては、淨瑠璃の文句ぢやないが、「お情け餘つて情けない」と思ふからである。

あの公判の後に、判事君の手元へ提出した上申書にも書いて置いた事だが、僕が敢て自ら死刑を要求する心事を付度して「氣が上つて仕舞つてゐるんだらう」とか「燒酎半分だからあんな事が言へるんだ」なんていふ風に世間の人が（同志にはまさかそんな事を思ふ人はあるまい）考へはしまいかと思つて、ふと淋しい氣の起ることがある『世間の奴等が何んと付度しよう』とそんなことを氣にすることがあるかッ、しつかりしろ!!と腹の何處かで叫ぶものがある。が、それと同時に「しかし、出来るかぎり一般の人に自分の心情を正當に理解して貰ひ度い」といふ慾望も強く頭をもたげて来る。そして「生は多産だ」といつたギョーの言葉がしみにみと思ひ出されて来る。

僕が無期よりも死刑を希望する一つの理由は、極めて平凡な、安きを願ふといふ心からである。無期よりも死刑の方が樂な刑だと信ずるからである。長年の歲月を費して、じりじりと殺されて行くよりも、一と思ひに殺される方が、樂な殺され方だと思ふからである。戦場で切り合つた昔の武士は、負けた方の武士を長く苦しめない爲めに早く止めを刺してやつたぢやないか。そして、それが武士道徳として尊重されたぢやないか。引例に少し無理があるかもしれぬが、僕の死刑よりは無期を重しとする心の動きは、同じ處から出てゐるのである。

言ふ迄もない事だが、我々が『生』といふものに對して抱いてゐる意識は、單に食つて糞を垂れるといふ事だけではない。

世間の人は「だつて、無期だつたらまた社會に出られるかも知れないぢやないか。恩典といふものもある事だし……」といふかも知れぬ。然し我々主義者には絶対に恩典といふものはないのだ。それに預つたためしはないのだ。

だが、同志諸君は必ず言ふであらう。

『恩典は素より問はない。が、君は、社會の變革は君の生きてゐる中には來ないとも思つてゐるのか。君はそんなに自分達の運動を見くびつてゐるのか。何故、生きてゐたいと思はないんだ。きつと!! きつと!! と信じないんだ。』

と。馬鹿な!! どうしてそれを僕が確信しないであらうぞ。

けれども、僕の確信には『信ぜよ。然らば得られん』といふ様な、單純な宗教的あこがれの

信仰はない。僕の確信を築き上げたものは、我々の伸び伸びして止まない生の成長を妨げ踏みにじる處の、社會制度との闘ひから得た經驗である。全世界に亘つての、遠く、處ぐる者と處けらるゝ者との相闘ひ來つた經驗の集積であり、殊には資本主義制度の必然が腐らした、我々労働階級の經濟組織に對する偉大な自覺である。その創造力である。故に、僕の確信を築き上げてくれたものの中には、その強き意志と行爲に伴つた、絶えざる深刻な思索がある。理智の働きがある。そして僕のこの理智は「いまに來るんだ!!」といふ様な宗教的信仰心には満足しないで、戦ひつ『來るべき時機』を測量し、あらかたの時機を紙の上へ圖を描かせる。戦ひは時に止まり、時に退きつとも、戦線は加速度を以つて進んで行く。その度毎に圖面も又、第一近似價から第二近似價へと益々正確さを増す。

この測量圖——。そしてこの測量圖が、或は僕が描いてゐるのと、同志諸君中の殊に親しい諸君のそれとの間には、多少の相違が出來てゐるかも知れない。しかし僕の測量圖によつても、僕の命さへ全かつたなら、嬉しい光は必ず見得ることになつてゐる。

（註）圖面は、戦ひの進行狀態によつて絶へず訂正されて行かねばならない。）

『その、光は必ず見得るといふ希望があるのに、何故死刑を自ら求めるんだ。監獄生活が堪えられないのか。極寒のシベリアに二十年近くも堪えた同志を見よ。パウロンは土牢の裡に四年間鎖づけにされたが、大元氣で出て來たぞ。五寸釘寅吉といふ奴だつて、まだ北海道の獄に健在だといふぢやないか——』

斯う言はれりや、一言もない様な氣がする。が「監獄生活がつらくて自ら死んだ」なんて言はれるのは、僕も裏切だ。だから『自殺』だけはしないから安神してくれがいい。

けれども、僕の體は随分無茶で押し通して來た體である。二年や三年の監獄生活でまゐる様なこともあるまいが、そんなに長くは（自ら描いた圖面を眺めつつ）保つまいといふ自信がある。そしてこの内省が、無期よりは死刑を選ばせる理由の一つになつてゐる。

次に、假りに僕の體が朽ち壞えて、娑婆に飛び出す時に際會したとする。處で、その時こそは、皆んなが根限りの大活動をせなければならぬ場合である。一層活動力ある人間を要する時である。その場合に飛び出した僕は、生きて居たといふだけの事で、體は何等の役には立つまい。頭も呆れてしまつてゐる。その時の形勢が眞暗だ。ぢや、ただ徒らに、諸同志の足手まといになるにすぎないぢやないか。諸君、監獄の中でした切つて了つた人間が如何に慘めな姿であるかを考へて見てくれ給へ。これは餘り消極的な考へかも知れない。悲觀的なたとえはれるだらう。けれども、僕には斯ういふ風に考へられるんだ。そして、この心持がまた、無期よりも死刑を望ませる一助となつてゐる。

も一つは、僕の様な貧弱な人間は、先づ先づこれ位の生き方が出來れば充分だと思つていい。これで死んだつて別に未練はないといふ極く「つぼら」な考へからである。

だが、如何に僕だつて、こんな消極的な、或はつばらな考へにのみ支配されてはゐない。無期よりも死刑を求めた僕の心の中には、もつと積極的な力がより強く働いてゐるのである。

お茶番に終りしことも死の刑を

受けていささか意義を深めん

これは、あの死刑を求刑された當日に作つた僕の歌である。歌と名乗るには餘りにも藝術的匂ひのなさすぎる、砂を噛む様な歌だが、兎にかく短歌の形式をとつて歌つた、僕の感想なのである。

『フワン、いよ／＼死刑の求刑だな、よし死刑にしろ、俺からも死刑を要求しよう。俺の行動は空彈だつたなどといふお茶番めいた事に終つてしまつたが、しかし死刑になれば、僕の行動は失敗を取り返して餘りある程の意義が加はるんだぞ。僕等の死刑が同志の運動の上に響らす影響——、社會人心に及ぼす影響——、それを今に思ひ當るがいい。よし、僕は喜んで死刑にならう——』

僕は斯う考へたのである。ギョーは『擴充を求める生の力は、生きんが爲めに自らの生の破壊をすら敢てする』といふ意味のことを言つたと覺えてゐる。死刑!! それは有期刑や無期やによつて得る事が出来ない、意義深き生き方を僕にさせてくれるものである。これの意義の深さは、彼等には解りつゝあるまい。むしろ彼等は、これによつて運動を續め得る位に考へてゐるかも知れぬ。だから、世の中は面白いのだ!!

一つの結論に導いてゐる、積極的な考へと消極的な考へとのこんぐらがり具合——、それが和田久なのである。これが『君と議論をしてゐると妙に恐怖を感ずる』と言はれ、かと思ふと又『滑稽味のあるツボ久』とも呼びなされて來た、僕なのである。要するに和田久は、何處までも諸君の眼に寫つて居たまふ、矛盾だけの、和田久らしい和田久なのである。少し脱線かな、呵々。)

處で、も一度、くり返して言つて置くが、僕は『監獄生活がつらくて自殺した』なんて言はれるのは裏續だから、たとへ無期か無期に等しい長期刑になつたところで、斷じてそれはやらない。

僕はいま、前記の諸理由によつて無期よりは死刑を要求してゐる。その方がさつぱりしていいし、また意義もあると信じてゐる。しかし、若し無期なりそれに等しい長期刑にされてしまつたなら、その時はその時で、生きられる限りは命を大切に生きてゐるつもりである。『どうせ俺の様な體は駄目だ!!』などといふ自暴的な身の拔ひをして、自分から死を早やめる様な事も斷じてやらない。生きられるだけは大切に生きてゐよう。

僕が再び諸君と手を取り合ふ日が來たとするならば、その時の僕は、たぶん何等運動には役立たない『生ける屍』に過ぎなくなつてゐるだらう。だが、生きてゐよう。そんな『生ける屍』でも、猶ほ使ひ道によつては身に相應した使用が出来るかも知れない。僕が初めて社會主義運動に身を投じようとした時には、『どうせ僕には學問はなし、何等能力もないのだから、せめて演説會の下足番なりとして、此の運動の下で働きたい……』と心に念じたのであつた。

——さうだ、あの心持ちで對したなら、生ける屍にだつて猶ほ生き甲斐はあるのだ——と深思もする。それに、よし、社會的活動は出来なくなつたつて、再び社會を觀る、といふ事が嬉しくない筈はない。

だから……その時には、生き得る限り生きてゐようとは思つてゐる。

裁判の正體

【十行削除】

監獄で、精神修養の爲めに貸してくれた『徒然草』の中にも、斯んなことが書いてあつた。

『……されば、盜人をいましめ、ひがごとをのみ罪せむよりは、人の飢えず、寒からぬやうに、世をば行はまほしきなり。人、恒の産なきときは、恒の心なし。人きはまりて盡す。世治らずして、凍餒のくるしみあらば、科のものを絶ゆべからず。人を苦しめ、法を犯さしめて、それをつみなはむこと、不憫のわざなり。……』

世治らず、凍餒のくるしみがあるが故に、人極まりて、法を犯すに至る。すると、警察が其の人々を引つ摺へて、裁判が之れに刑罰を命じ、監獄が之れを執行する。そして之れが、國家の安寧を保つ爲めであり、社會の秩序を維持する爲めであると稱されてゐる。

彼等、官憲者は、全くさう信じてゐる。正しい事を行つてゐるのだと、無邪氣にも信じてゐる。そして、社會を罪惡と混亂との淵へおとし入れ、社會秩序を益々攪亂しつゝあるものが、彼等の守護してゐる資本主義經濟組織それ自身の發達であることを悟らない。甚だ馬鹿氣話ではあるが、安寧と秩序とを維持してゐるのだと思つて行つてゐる事は、實は、眞の安寧と秩序との破壊者の爲めに盡してゐるのである事を、彼等は悟らない。

裁判は、法律は、現在のまゝの社會的秩序（實は混亂腐敗）を維持する爲めに働く。處で、現在の社會組織なるものは、資本家の求むるがまゝの値段で勞働力を賣るより仕方のない勞働者の勞働力を購つて商品生産をなし、その間、剩餘價値の奪略を行ふ事に依つて益々肥え太つて行く資本家階級の支配する社會組織である。それが根本基調をなす社會組織である。勞働階級にとつては、至極望ましくない、憎むべき社會組織である。故に今日の法律なり裁判所なりの行ふ處の役目が、全國民の、全社會人の爲めの仕事でなく、一部少數階級の爲めの、即ち資本家階級の爲めの役目である事（當事者はそれに無意識で居るにせよ）は、必然のことなのである。裁判所は、現行法律に基いて正邪を裁斷する。しかし、その法律なるものは資本主義制度の

都合よき様に作られたものである。その法律が有つてゐる正と邪との觀念は、資本家の爲めの正であり、資本家の爲めの邪である。それは全社會人の爲めの正邪ではない、殊にプロレタリアートの爲めの正邪では決してない。

處が裁判所はそれを全社會人が有つ正義觀に基いてゐる様に振舞つて、傲然と裁判する。だから僕等には、その『振舞ひ』がお芝居のやうにしか觀えないのである。

裁判は公正なものである——。少なくとも現行法律に基づくといふ點に於ては……と我が辯護士は信じてゐるらしい。それはまあ、その通りだらうと、僕も思ふ。

だが、法律のことはよく知らないが、或る犯罪に或る文字を適用するに就いても、裁判官の頭の働きのよつて、随分その適用法文が違ふぢやないか。

又、此處にその罪によつて一つの法文が適用されたとして、さて、その法文なるものがまた、随分範圍が廣いぢやないか。爆發物の第一條なんかは、三年(?)以上死刑までであるとかいふぢやないか。それを、最低にするか最高にするかは、やはり裁判官の頭の働きの如何によつて随分左右されやうぢやないか。

大杉等三人を虐殺した甘粕は、十年の刑に處すべし(それも二年足らずで放免してやつてだ)、その復讐を企て、五厘銅貨大のやけどを負はせた者には、死刑を求刑すべしといふ様なこんな使ひ分けが立派に出来るのである。現在の裁判制度といふものは——、裁判官の頭の働きの方といふものは——。

『でも、法律には基づいてゐる……』てかね。いや、それはさうに違ひあるまい。それは僕だつて夢々疑はない。呵々。

資本主義經濟組織は、全人類の生活を決して幸福にしないことを吾々は経験した。そして、新しき意義ある生活方法——萬人の自由と經濟上の安定——の方向が、社會主義經濟組織の方へと向つて居ることを吾々は認識した。

吾々は今、資本主義經濟組織の發展が、それ自らの組織を崩壊して行きつつある状態を眼前に見、その崩壊の混亂の爲めに、益々悲惨な生活へと迫り込まれつつある。然し又それと同時に、その資本主義經濟組織によつて生み出された労働者階級こそ、新しき社會を建設すべき創造力である事を知つて來た。

資本家階級と労働者階級との闘ひ——意義ある生活は『萬人の爲めに生産し萬人の自由を尊重する新社會』は、この闘ひの中から生れつつある。吾々はそれを生む爲めに闘争をなしつつある。

吾々は、資本主義經濟組織と戦ふ。處で、裁判なるものは、この制度を維持せんが爲めに備へられてゐるものである。然らば、吾々の行動と現行裁判との接觸は、當然『戦ひ』を意味す

るものでなければならぬ。

吾々が法廷に起つのは、法律を是認し、公正な裁斷を乞はんが爲めではない。其處には、吾々の求むる公正は存在しない。吾々が法廷に起つ時は、即ち、敵の大きな力に引つ搦まれた時である。敵の爲めに働く機關に引つ搦まれつつ、敵の爲めに働く機關に裁斷されつつ、其處にあつて猶ほ吾々は戦ふ。戦ひの聲を上げる。この聲が眠れる味方と呼び醒ます。味方の勇氣を呼び起す。

この意味に於いて、法廷は又、吾々の戦場である。

吾が資本主義經濟は、今や崩壊の域に達してゐる。法律、裁判が因つて立つ處の經濟組織そのものに崩壊の兆候が著しくなつてくれば、謂ゆる上層建築たるそれ等の上にも、何等かの變調の現はれて來ない筈はない。その兆候が反映しない筈はない。經濟的混亂は、從つて社會的混亂は、當然に、法律、裁判の上にも現はれて來てゐる。即ちある點は、大いに民衆の力に押されて譲歩しつつあり、ある點は不安を感じて更に反動的になりつつある。

社會の波は、當然、裁判の上にも打つてゐる。波の變化が此處にも現はれてゐる——。

裁判の經過を何う觀てゐるか

以上の立場から、僕達のごんどの裁判經過を觀るとき、其處に僕は、種々な趣味ある面白いものを發見する。

僕は先づ、大正七年の米騒動頃から以後の思想的變化が、裁判官の態度なり調子なりの上に著しい變化を來たしてゐる事に氣づいた。沼澤審判の態度も別に喧嘩面ならねばならぬ様なことはなかつた。公判になつてからの判事の調子も、上出来だと思つた。檢事だつて、あれなら普通だらう。

布施さんは『……しかし、檢事の御論告を読まれた調子に、どうも活氣がなかつた』と法廷で皮肉つた。全く不思議なほどその態度に元氣がなかつた。確信に燃えた眞剣味が見えなかつた。何事かをちつと内省してゐる心淋しい人の様子が見えた。私は、この論告を読み上げる役目に當つたから、これを讀み上げるのである』といふ風にさへ見えない事もなかつた。不思議な人だといふ風にも思へ、氣の毒な人だな、とも思つた。

大阪の様子を聞いて、必ず傍聴禁止に違ひないと思つたのが、公開の公判廷だつた。例の不起立問題は、初めからは認された。

判事は、辯護士よりの證據申請——甘粕事件の一件書類及び關係人物。龜戸事件の書類。福田大將。其他——を全部却下した。そして、其の理由として『それ等は直接の關係がないし、殊に、そんな事はとも此の裁判で調べ得るものではない』と告げた。そして、更に溫言を以つて附け加へて『しかし、辯護士によつて調査された事實は、辯論の時に充分に述べさせます』

と言つた。

それに對して布施さんは『本事件は、甘粕事件、龜戸事件、等に對して起つたものである。故に、これ等の事件の真相を明らかにせない（うやむやに事實は葬られてゐる）ならば、此の被告人を正當に裁く事は出来ない』と切言した。僕は『布施さんは裁判を買被りすぎてゐる。それを明らかに出来ないのが本當だ』と述べた。

これは、明らかに爲し得ないのが本當である。それが明らかに出来る事なら、甘粕事件は軍法會議で明らかにした筈である。龜戸事件は、既に既に裁判所によつて明らかにされた筈である。それは出来ないのである。明らかにしてはならないのである。その出来ない處に意義があるのである。吾々は明らかにされて居ないといふ事を、民衆の頭に浸み込ませばいい。何故それが明らかにされ得ないかは、民衆が考へる。深く考へるやうになつて来る。いや考へつゝある。民衆の考へは熱して行く。

しかし、面白いのは、その判事の態度、調子である。僕はそれを、わざと説明すまい。ただ、波は動いてゐる、と言つて置かう。判事の態度、調子は、この波の影だと抽象的に言つて置かう。

判事は『どうも、幸か不幸か、私はこんな裁判に當つたので……』と、情けなさうに言つたぢやないか。布施さんの、一句一句と刻んで行く痛烈な辯論に對して、『軍法會議のやつた失敗を私に攻撃した所で……』と、呟く様に言つたぢやないか。更に『私が氣に入らねば忌避して下さいよ、何時でも代りますから……』とも言つたぢやないか。

——波が寄せてくる——。しかし、之れは波そのものではない。その影である。

この影は、陸軍大將福田雅太郎の豫審調書の上にも大きく差してゐる。

彼は『大杉夫妻（宗一の事は沈黙して）を殺したのは、國家、社會の爲めに害を除いたのである』なぞと、陰では好い氣になつて反り返つてゐるに違ひないのだが、さて社會に對しては、さうは言へないのである。『私も、どうもとんだ事が出来たと思つたので、全く自分は興り知らぬのである』と、言はなければならないのである。

又、『軍人精神は、斯の如く犠牲心に富んだ立派なものである』なんて、陰では反り返つてゐるに違ひないのだが、一般公衆に對つては、『軍法會議の甘粕の態度が男らしくはつきりせず、至極あいまいであつた爲めに、和田等が私を疑つた。無理もないが……』といふ様な意味のことを言はなければならないのである。

更に又、『私ですら、甘粕等の背後には何者かがあるやうに疑ぐつてゐるのだが、何にしろ軍法會議で済んでしまつたことだから何んとも仕方がない——』なぞと、自分の屬する神聖なる（？）軍法會議をさへ貶す様な口吻を吐かざるを得ないのである。民衆の前には——。

彼等は最早や世間體だけでも、さうだ、世間體だけでも、傲然として横車を押し通せなくなつて來てゐるのである。

お、影よ、

その、跳れる魍魎の如き影よ!!

——波は進む。高く、強く——

福田を最初に逸せし日より正に一週年に當る

大正十四年八月十四日記之

於市ヶ谷鐵窓裏 和田 久太郎